

昭和43年7月1日第3種郵便物認可
平成17年1月5日発行(毎月5日1回発行)
第45巻1月号(通巻546号)

風土



1

1107

ポインセチア

神蔵器

波郷恋ふ白佗助の太郎冠者

波郷忌やゑくぼのごとき日を賜ふ

墓に閉づ眼ひらけば雪螢

どんぐりを供へころころころろ

綿虫や胸に火のつく風鶴忌

一つ会ふ綿虫やがて二つかな

見送りて見送られをり雪螢

波郷忌や無患子の実の落つを待つ

木の実降る白鳳仏を玻璃囲ひ

新蕎麦や己がすすり音遠しとも

百花競ふ冬ばら園に四面楚歌

多磨霊園 三句

桜紅葉箒担ぎて押し出せり

蓑虫の顔出す四方よもに霊たまのこゑ

一〇区一種白秋小春日和かな

日や砂や遊び足らざる穴惑ひ
神々の留守烏骨鶏卵抱く
武蔵野の霊水噴けり冬桜
的射ぬく音一つして神の留守
銀杏干す城太郎亡き念珠の手
黄落の真つ只中に厄除け受く
白毫寺の萩刈る頃と思ふのみ
反故を焚き後より少し牡丹焚く

冬 日 宙 に 六 賢 台 は 開 か ず の 塔
腹 中 に 冬 日 を し ま ふ 狸 燈 か な
返 り 花 咲 い て 遠 く に 父 母 睦 む
貸 し 借 り に 屋 根 替 茅 の 十 島 ほ ど
禁 色 の さ る と り 茨 の 実 を 愛 す
雁 仰 ぐ い そ つ ぶ 橋 の 半 ば に て
冬 に 入 る 本 の 高 嶺 に 虚 子 全 集
ポ イン セ チ ア も つ と も 燃 ゆ る も の 選 ぶ



竹間集

同人作品



冬銀河

岩木

茂

熟柿吸うて五百羅漢に紛れをり
残る虫鳴いては耳を澄ますかに
露万朶光る千丈ヶ原ゆく
台風一過残る木の葉が紅葉して
蔓引いて零余子も露も零すなり
冬ざるる棚田を冠る溶岩岬
無限大イコール零の冬銀河

こぼれ萩

佐藤よしい

胸裏にも風吹きそめりこぼれ萩
望郷や月の面よぎる雁の列
余生まだ曲折あらむ鴟の声
『狭き門』今も愛書に夜半の秋
別れにも永久と束の間星流る
ジーンズの膝のたるめり晩稲刈
文化の日割りし胡桃に部屋いくつ

うそ寒

相沢有理子

秋を病みいつしか癖の手櫛かな
彼の人を呑みし杣山霧の中
うそ寒や子が掻き出だす樋の火山灰
杉丸太磨く太腰秋晴るる
違はずに夕べ紅さす酔芙蓉
愛の羽根つけ地下街に藻塩買ふ
夫の眠り待ちてペン採る十三夜

山河集

同人作品



神蔵
器選

火の山のあしたへ零す柞の実
電線を地に埋め満天星紅葉かな
黄落やひとの華燭の宴果つ
磐梯へひとたび翔けし帰燕かな
松茸の一本なれば供へけり

小林 和子

一塊の八ヶ岳一群の赤蜻蛉
籠に盛るパンの温みも雁の頃
地下街にある七曲り穴まどひ
故里の時の彼方へ威銃
紅絹裏の形見を解くや秋徽雨

山本 浪子

ふたもとの十月桜に会ひ得たり
秋声や小指にからむしつけ糸
触れずには戸口に行けぬ名草の実

林 裕子

人去りて夕日のあそぶ刈田かな
無花果や一族まぬがれがたく在り

継ぎ障子いくつ十月桜咲く

南奉 栄蓮

鴟猛る備長炭の俵立つ
足踏ん張つて「寒山拾得」竹の春

北斎の

秋冷や凝る「鳳凰」の天井絵
「釈一茶退位」の墓に栗供ふ

桐一葉死後も残りて坂一つ
兄逝きて百日田水落しけり

井口ふみ緒

子規庵に「はて知らずの記」木の実落つ
色鳥やペン皿にペン溢れしめ
下りて行く南谷より赤とんぼ

新人賞作品

旅靴

山本浪子

行く秋の日付変更線越ゆる
天高し人種の坩堝てふ都
丈高き回転木馬木の実落つ
芭蕉忌や傷の増えたる旅靴
高麗の茶碗の罅や花八ツ手
福耳の親子なりけり飾売
直面の仙台平の淑気かな
「考える人」を見てゐる懐手



八雲には妻子のありて雪女
春の夢象の連隊待つ砦
春時雨旅人のみが傘をさす
マハラジャの離宮に目覚む百千鳥
菜の花忌海にもシルクロードあり
薫風や破風の高みにハリストス
したたむる絵葉書二枚白夜かな
まん丸なアイコンの瞳暑気中り
ブラボーや膝の扇子がすべり落つ
巴里祭グラスに指紋残しけり
いくたびも洗顔に立つ土用入
羅の膝に置かれし謡本

新人賞作品

マタイ伝

菅原末野

太き針もて縫ひ初の背番号
七草の一つに花の兆すあり
伊勢海老の髭の巖たる一の重
校塔の春を刻みし大時計
春塵や黒き表紙のマタイ伝
琉球の絵皿の双魚夏兆す
藤房の揺るる李朝の白き肌
大原女の藍の香放つ夏衣



飛箱の最上段を跳んで夏
夫の飼ふ金魚に名前あるらしく
みんなの声の極のフォルテイシモ
身の内に不開の間あり雁渡る
秋時雨割りしばかりの薪ぬらす
常滑の甕の黒釉秋燕
子を帰すやうに帰燕を見送りぬ
大壺の影の鎮もる冬はじめ
水引きの壺の轆轤目冬ぬくし
干魚の身の裏表冬深むむ
枯木立雀こぼしてしまひけり
天狼に最も近く獵男棲む

新人賞作品

色鳥

安永圭子

蝌蚪の紐けふのネクタイ水玉に
万葉の四時美恋歌蜩汁
咲く前に手折りし梅や蒼の黙
今朝の春産毛剃り屋の女人かな
百元札に博愛二文字冬暖か
啓蟄や一途の道のありてこそ
交りなく大山蓮華響きけり
燃え盛る八雲の里の百日紅



突然に犬走り出す雲の峰
そば茶飲む話し相手の涼しき風
すれ違ふ日傘に小倉遊亀図思ふ
竹林の奥蟬しぐれ蟬しぐれ
百年の糠床届く盛夏かな
ベランダを飛び出す声や水遊び
立秋を向うに父母を迎へけり
一葉の井戸水受くる秋海棠
原宿の松ぼつくりのオブジェかな
窓外に柿すだれ成す料金所
色鳥や八千穂の土牛美術館
手締めして熊手一体歩き出し

風土集



神蔵 器選

子が少し離れて歩くいわし雲 東京 中嶋 陽子

芋嵐机上に引越し見積り書

草の実や小言は一つのみにして

農場の朝の搾乳白露かな

メール打つ指の速さや芋嵐 東京 柿沼 盟子

ガソリンスタンドに蜻蛉の入れ替り

水落す田の二辺ゆく通学路

秋時雨竹屋に今年の竹並び

透明の傘打つ雨や秋のこ糸

色鳥やジャングルジムの上に座し 東京 林 裕子

歩むべき道は一筋獺祭忌

二つ三つ木の実の落ちてそれつきり

珊瑚樹や橋を渡さぬ中之島

またもとの道に戻りぬ後の月

身に入むや畳に拝す離洛帖

仕残しのあれば幸せ大根蒔く 横浜 近藤幸三郎

雁鳴いて祭当屋の決まりけり

目札に参禅終る九月かな

一遍の座像は知らず大豆引く

澄む水に沢蟹立てし砂煙

盆の僧仏の父母と二三言 横浜 池田加代子

馬遊ぶ大学農場赤のまま

水澄みて友禅流しの浅野川

香ばしき紅葉の天麩羅高雄茶屋

願ふほど飛ばぬ土器秋の行く

水澄めり鳳凰堂に来迎 川崎 陣野今日子

べつたら漬抱へて渡る日本橋

水澄むや立木観音笑みたまふ

ひと足ごとに萩のこぼるる白毫寺

長き夜を覚めて子のこと夫のこと